イナズマイレブン ～Hungry Heart～

巻波 彩灯

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

円堂達を擁するイナズマジャパンが世界を制してから五年が経ったある春の日――静岡にある創立二年目の新設校・青天中学校にある一人の少年が入学する。

その少年の名は巽大地――県内一最強の矛と自称する熱きサッカー少年が、たったの六人しかいないサッカー部に訪れ、運命の歯車が動き出す。

目次

プロローグ ―――――――――― 1
第一話：小さすぎるぜ、新入りィ！
6
第二話：あたしチャンはあなたに挑戦状を送りますのんっ ―――――――――― 27
第三話：あなたは太陽。煌々と闇を照らす太陽、私はその光を地より見つめるもの ―――――――――― 47

プロローグ

「ファイアトルネード！」

一人の少年が炎をまとい空中で回転してはシュートを放つ。するとボールは燃え盛りながら少年が狙っていた所へ一直線に向かって行く。

壁に描かれた三重の円の中心を捉え、轟音を響かせる。近くにいた小鳥達が危機を感じて慌ててその場を飛び立つ。

「今日も絶好調だな、俺！」

少年は着地し、跳ね返ってきたボールを右足で受け止めた。ボールは長年使いこまれたのか、激しい汚れや焦げているところがあちらこちらに目立つ。

そしてそのボールを扱う少年は体つきがしっかりとしていて、背は子供にしては高い。短く整えられた茶髪をそよ風が撫で、眼前の壁を見つめる茶瞳は力強い光を放っていた。

「っし、もう一回だ！」

少年はもう一度先程のシュートを打つ。またしても強く壁に当たった鈍い音が響く。

ボールが戻ってきたらシュートを蹴って、また戻ってきたらシュートを打つを繰り返

す。そして何度目かのシュートを蹴り終わった後、少年は時計を見る。
すると、少年が予定していた時刻よりも針が動いていた。少年はその事に気付くとボールを小脇に挟み、急いで自宅に戻るのであった。
桜が咲く頃合い、たくさんの新入生が期待や不安で胸を膨らませ新しい生活をスタートさせる。
そして彼らを引き入れる為に在校生達が呼びかけては興味をそそる様な話をする。元から興味のある人物なら即仮入部の行っていたり、未経験だがその先輩の話をきっかけに興味を持った者が一つ一つ確認しながら書類を書いていたりとしていた。
それは新設校である青天中学校でも変わりがなく、様々な部活が新一年生を勧誘していた。その中であまり勧誘に精力的ではない部活が一つ。
人気のない場所で特に装飾もなくサッカー部と書かれた木の板を長机に立てかけ、男女二人がパイプ椅子に座り、時折談笑しながら新入生がやって来るのを待っていた。
「ふーん、円堂とか吹雪とかはすぐに特集組まれているな」
黒の詰襟のボタンを二つほど開け、眼鏡を掛けている少年は手に持っている雑誌の特集ページを見て呟いた。
その言葉を聞いた隣にいるブレザーを着ている少女は特集ページを覗き込む様に見る。ページの見出しには「伝説を再び作った男・円堂守の誕生秘話」や「今は亡き弟に

捧ぐ……吹雪士郎、プロ初ゴールに込めた想い！」と書かれている。
「そりゃ、初めて世界大会を優勝した日本代表のメンバーだもの。注目しないはずがないでしょ？」
「それも五年前の話だろ？　未だにそいつらを引っ張ってきやがるって、どんだけ暇しているんだよ」
「あはは、やっぱりサッカーが流行るきっかけを作った人達だからじゃないかな？」
少女の意見に少年はため息をつく。くだらないと言いたげな表情だ。
「でも、ウチには人集まらないからあまり恩恵がないよね……静岡はサッカー王国って呼ばれているってぐらいなのに」
「新設校行っても全国に行く可能性が低いからだろ？　少し前から全国行けるのが二チームになったからっってもここは強豪がひしめくんだからよ」
「今年はせめて地区予選に行きたいねえ……」
少女は頬杖を付き、嘆く。そう青天中のサッカー部はどういう訳なのか部員が集まらず、彼女と少年を含めて六人しか部員がいないのだ。
円堂達が世界を制してから世の中は空前のサッカーフィーバーだというのに、青天中のサッカー部は恩恵を受ける事ができていない。公式大会に参加する事はおろか、まともにサッカーをする事すらできない部員の少なさ。

去年開校ばかりとはいえども流石に予想外な事態。しかも勧誘する体力は去年に使い果たしてしまったのだから、今年はあまり積極的になれない。
「サッカーがしてぇ……」
少年は天に仰いで思いを口にした。すると、思いが通じたのか一人の少年がやって来た。
「えっと、ここサッカー部ですか？」
「んあ？　そうだけど？」
声に気付いた少年は来訪者を鋭い眼光で見る。真新しい詰襟を大柄な体に身を包ませ、茶色の瞳はその眼光に負けじとしっかりと見つめ返していた。
「こら、荒木君！　そんな怖い顔しないの！　……ごめんね、怖がらせちゃったよね？」
「いえ、別に。俺は大丈夫ですから！」
大柄な少年はニカッと笑い、少女達に対面している椅子に座る。その様子に少女が逆に驚いた。
「え!?　荒木君の事を怖がってすぐに逃げ出す人が多いからちょっと意外かも」
「こんぐらいでビビってたら、サッカーできないですって。俺はここでてっぺん取りたいですから」
「ほう、言うじゃねえか新入り。お前、名前教えろ」

荒木と呼ばれ続けていた少年は先程と同じ様な眼光で目の前の人物を睨み付ける。大柄な少年は物怖じせず、右手の親指で自身を指しながらはっきりと自分の名前を伝えた。

「俺は巽大地！　県内一最強の矛だ！」

それから数分後、大地がその場から立ち去り、また二人だけになる。

「巽君か……結構面白い子が入ってきたよね」

赤みがかった茶髪をいじりながら少女――樋口有希は荒木に話しかける。

「まあ、今まで声をかけてきた連中に比べたらマシだな」

荒木強志はボサボサとしている緑髪のショートヘアーを掻きむしりながら、仮入部届を見つめる。お世辞にも綺麗とは言えない字だが、氏名や略歴が丁寧に書かれていた。

「しかも、あの風早君と同じリトル出身だから即戦力になるよね」

「さあな、どちらにせよ俺が相手をぶっ潰す。そんだけだ」

「相変わらずだな、荒木君は」

と話している内にまた一人が訪れて来た。二人は宣伝もしていないのにまた人がやって来た事に驚きながらもその人物を招く。

運命は少しずつ動き出していた――。

第一話：小さすぎるぜ、新入りィ！

「聞いて驚け、てめえら!!」
部活勧誘を終えた強志が部室のドアを蹴飛ばしながら開ける。蝶番が悲鳴を上げていたが、何とか持ちこたえていた。
「部長、もう少し静かに開けてくれよ。いきなり部費が修理代に飛んじまったら、大変なんだぜ?」
「ああ?　んな事より、これを見ろ!」
強志は獰猛な笑みを浮かべて、テーブルの上に仮入部届を叩き付ける。枚数は四枚。
「おお!　マジか!?　今年は四人も来たのか!?」
「ほう、意外だな」
「……こんなに集まるものなのか……」
「ケケ、それでも去年と比べたらナ」
部員達は各々率直な感想を言う。それらを聞いて強志は勝ち誇ったかのように、胸を張った。
しかし、目元が前髪で隠れている不気味な男の一言が現実に呼び戻す事となる。

「デモ、これじゃあサッカーはできないナ。まだ九人しかいないダロ？」
強志はその発言をした男を睨つけ、ただただ押し黙るしかなかった。
――その沈黙を破るかのようにある一人の男性が部室へと入ってくる。男性に遅れて有希も入室。これで現サッカー部のメンバーは勢揃いとなった。
「やあ、勧誘ご苦労様。結果は樋口さんから聞いているよ」
男性の顔立ちは強志達よりも年を重ねていながらも柔和。服装は彼らと違い、カッターシャツとスーツパンツでまとめている。
「おっ、生久良センセ！　おはようございます！」
白髪をツーブロックで整え、サングラスを掛けている少年が礼儀正しく男性――生久良大悟（なまくらだいご）に挨拶をする。他のメンバーも一様に挨拶した。
そう、生久良はサッカー部の顧問を務めている教師だ。ちなみに強志と有希の担任の教師でもある。
「ああ、おはよう。今年は四人も集まっているって聞いて、びっくりしちゃったよ」
「それでも足りないんですけどね」
「それはこれからなんじゃないかな？　まだ仮入部期間だし、他の部活に行っていた子もこっちに流れる事だってあり得るよ？」
「逆を言うと、最初からこっちに仮入部してきた奴らが流れる可能性もあるって事ダロ

？」

　またもや的確な一言に発言者は口を閉じてしまう。微妙に暗い雰囲気になった場を盛り上げたのは、この男だった。

「だあああ！　面倒くせぇ！　そんでも諦めずに勧誘すれば、良いって事だろうが！」

　先程の白髪の少年――鉄閃理（くろがねせんり）は少し重い空気を吹き飛ばすかように大声を張り上げる。

　周りは目が覚めたかのように気が付くが、同時にその大声に眉を顰めたり、耳を塞いだりしてしまった。

「うるせぇえんだよ！　このオリハルコン!!」

「うおおおお!?　危ねぇぇぇぇぇ!!」

　一番癇に障った強志が閃理に向かって回し蹴り。閃理は殺意が込められた鋭い回し蹴りを何とか躱す。

「少しはその大声どうにしかしろ！　やかましいんだよ！」

「部長、それはないぜ!?　ってか、殺意込めて睨んでくるのやめろって!!」

「そうだよ、荒木君。まだ話は終わっていないから、遊ぶのはその後にしてね」

　有希の一言で強志は閃理と戯れるのを止めた。若干不満気ではあるが有希には逆らえない故に、しぶしぶ元の立ち位置に戻る。

「勧誘するとしても情報はないとな……流石に手探りでは限度がある」

何事もなかったかのようにボサボサとした蒼髪と眠そうな目つきが印象的な少年――空賀鈴司が話を本筋に戻す。それに続いて、輪から一歩離れた位置にいる銀髪の男子生徒、夜華藤四郎が口を開く。

「確かにな……でも、今年の一年は凄い特技の持ち主がいるんだろう?」

「うーん、何か一年生を担当している先生方の話を聞いているとそうらしいね。僕はあまり話が聞けていないから、今度それとなく聞いてみるよ」

「ケケケ、とんだイロモノが勢揃いしてなきゃ良いけどナ」

先程からズブリズブリと一言を突き刺す人物――蛇崎利一はどこか他人事のように笑っていた。

「今年の一年生は個性豊かと言っているけど、先生達の顔を見れば、どれだけ苦労しているか分かるよ……」

生久良は今朝の朝会を思い出す。今年はかなり賑やかな子供達が入学してきたから、先生達もまた協力し合って事に臨むようにと言っていた一年の学年主任の目がかなり死んでいた事を。

しかし、これが他人事でなくなる日はそう遠くはない。着々とその足音は近づいていた――。

一方、その頃大地は入学式を終え、自分がこれから在籍するクラスの教室にいた。
周りには見知った顔もいたが、知らない顔の方が多い。ほとんどのクラスメートとは初対面だ。
自分の席で配られた教材に目を通していると何やら磯の匂いが右隣から漂ってくる。匂いの元が気になった為、横を向く。
すると、隣席の椅子の下にクーラーボックスが置かれてあった。恐らく原因はこれではないだろうかと大地は察する。
「おっ、何か気になるのか？」
「ああ、ちょっと磯の匂いがしたからよ。それ、お前の？」
持ち主らしき人物に声をかけられ、大地は視線を上げて目を合わせる。
目の前にいた少年は黒のミドルヘアで顔も体つきも特に目立った特徴はない。しかし、その瞳の奥は大海を思わせる程に穏やかながらも激しい光を放っていた。
「そうだぜ。丁度、実家から届いたもんだからよ、これからお世話になるところに持っていこうと思ってな」
「へぇ、そうなのか。お前、名前は？　部活はどこだよ？」
「俺は南波海人（なんばかいと）！　南波でも海人とでも良いぜ。ちなみにサッカー部だ！　お前は？」
「俺は巽大地！　俺もサッカー部だ！　よろしくな」

握手を交わす。すると、海人は気付いた。大地の手の大きさに。元から背があるとは認識していたが、それに見合うだけの大きい手をしている。

だからこそ、同じポジションだったら、かなりの好敵手になると感じていた。

大地も大地の方で海人の握力に少し驚いていた。軽く握っているつもりだろうが、ガッチリと大地の手を掴んで離さない。

もし、彼がキーパーなのであれば、これほど頼りになる奴はいないと直感した。

それから、担任の教師が来て、これからの話や自己紹介などで時間が経過。ホームルームの時間が終わると部活に仮入部している生徒達は一斉に飛び出して行った。

もちろん大地や海人も例外ではなく校内地図で場所を確認しながら部活棟にあるサッカー部の部室へと向かう。

「サッカー部の部室はどこだ！　まっ、このまま道のままに進めば、いつしか辿り着けるかっ！」

唐突に後ろから大きな声が聞こえた。二人は振り返るとその先には赤い髪の少年がこちらに向かって来ている。

二人は難なく少年を躱す。少年は勢いそのままに階段を駆け上っていく。

「おい、そっちにサッカー部はねえぞ！」

大地はその背に呼びかける。少年は駆け上がる足をピタリと止め、大地の方へ顔を向

ける。
「お前もサッカー部なんだろ？　俺達もサッカー部で今行くとこなんだ。一緒に行こうぜ！」
「お前らもか！　じゃ、一緒に行こうぜ！」
　赤髪の少年はすぐさま階段を駆け下り、大地達に付いて行く。その道のすがわら、互いの自己紹介を含めて会話を交わす。
「あ、そうそうオレの名前は日ノ丸昇（ひのまるのぼる）！　サッカーはまだ始めたばっかだけど、これからもよろしくな！」
「俺は南波海人！　俺もリトルの経験がねえから、気にすんな」
「え？　二人ともリトル入った事ねえの？」
　この中で唯一リトルに所属していた大地が聞き返す。サッカーを始めたばっかと言った日ノ丸はともかくとして、海人はリトル経験者だと思っていた為に経歴を聞いた瞬間、驚きを隠せなかった。
「大地はリトル入ってたのか？」
「ああ、そうだぜ。何てたって俺は県内一最強の矛だからな！　あ、俺は巽大地。よろしくな、日ノ丸！」
「おうよ、こっちこそよろしくな！　それにしても大地って、体でけえよな。リトルに

入っていたからなのか？」
「それは俺には分からねえ話だな」
　日ノ丸の言う通り、大地は少し前までランドセルを背負っていた年頃には見えない程に背は高く、ガタイも良い。
　しかし、隣で海産物が入ったクーラーボックスを持っている海人も背や体格は大地に劣るもののかなり筋肉質と見てとれる。
　それに比べ日ノ丸は小柄だ。二人がいなくともそうだと言われるぐらいに背が低い。それでもめげていないのは、彼が元来から常にポジティブすぎるだからだろうか。
「そんでも大地がリトル出身って言うのは心強いな！　……っで、県内一最強の矛って、どういう意味だよ？」
　海人は先程大地が言っていた単語に純粋な疑問を浮かべていた。言わんとしている事は何となく分かるが、好奇心が湧いてより詳しく聞いてみたいと思ったのだ。
「意味は簡単だ！　県内で一番強えストライカーって事だよ！」
「なるほどな！　大地はストライカーだったのか！　へへっ、こりゃ期待しているぜ！」
「オレもフォワード希望だけどさ、初心者だから右も左も分からねえから、色々と教えてくれよ！」
「ったり前だ！　とことん特訓に付き合うぜ！」

三人は気質が似ているせいか意気投合し、騒がしくしながら部室へと向かう。そして、また途中で騒々しい人物が目の前を横切った。

「早くサッカーしたい！　と言うか、ここどこ?!」

随分と小柄な少女。どうも迷子らしいが、動きは忙しなく落ち着くという事を知らないかのようにずっと動き続けている。

「お前もサッカー部なのか?」

困っていると思われる少女にいち早く声をかける海人。少女は天真爛漫な笑みでこう返した。

「うん、そうだよ！　私はフェリシー・アニエス・アルヴィナ！」

フェリシーの名前を聞いて海人は驚く。いや、後続の二人にも聞こえ、彼らもまた驚いて互いの顔を見合わせた。

どう聞いても日本人ではない外国人らしい名前だ。

それに彼女と目を合わせた海人はその相貌に息を呑む。日本人離れしている、ヨーロッパ系の外国人らしい目鼻立ちをしているからだ。

まさか、この学校で純外国人に出会う事なんて思ってもいなかったのだから、それには驚愕するばかり。

「どうしたの?」

「……お前って、外国人？」
「うん、そうだよ！　それがどうしたの？」
「いや、悪い。外国人の子がいるなんて思わなかったから、びっくりしちまったよ」
海人はありのままに言葉を告げた。フェリシーは特段気を悪くする事なく、そのまま明るい調子で言う。
「そっかー！　そうだったんだ！　あ、あなたの名前は？　それと後ろの二人は？」
「俺は南波海人！　後ろのデカいが巽大地でちっさいのが日ノ丸昇だ！」
海人は自己紹介も含め、後ろにいる二人を指差して彼らの事も紹介する。大地も日ノ丸も明るい笑みで各々口を開く。
「よろしく頼むぜ！　フェリシー！」
「よろしくな！」
「うん、よろしく！」
こうして、強志が持っていた仮入部届を提出したメンバーが揃った。彼らは明るい気質なせいか、賑やかな雰囲気のままサッカー部の部室へと向かって行った。
一年生全員が部室に入ると部員全員が総勢で出迎えた。たった六人しかいないサッカー部に待望の新入部員、これは手厚く歓迎しない訳がない。
「よく来たな、新入り共ォ！　歓迎するぜ！」

閃理が代表して挨拶をする。何故、サングラスを掛けているのだろうかと疑問に思う大地達。

その疑問が伝わったのか、閃理は理由を答える。

「コイツは俺の師匠からもらったもんで、お守りなんだ。俺の誇りそのものだぜ」

答えを聞いて理解する新入生達。「そんな事より」と閃理は言い、話を切り換える。

「お前ら、自己紹介してくれ！　名前は知っててもまだ顔は知らねえからな！」

そう言うと亥の一番にフェリシーが手を上げ、名乗りを上げた。

「私はフェリシー・アニエス・アルヴィナ！　よろしく！」

「おう！　お前が例の外国人か。俺もディフェンダーだから、お互いよろしく頼むな！」

「Ç，ｅｓｔ」

フランス語が飛び出るとその場にいたほとんどの人間が頭に疑問符を浮かべてしまった。

恐らく、「こちらこそ」とか「ええ、もちろん」という類で言ったのだろう。しかし、突然言われたのだから、頭が追い付かない。

「おい、てめえ。次からは日本語だけで喋れ。じゃねえとぶっ飛ばすぞ」

一番理解できない強志がレンズ越しにフェリシーを睨み付ける。完全に脅していたが、それに屈するお転婆娘でもない。

「Ｊｅ　ｃｏｍｐｒｅｎｄｓ！　次からは気を付けるね」
「だから、日本語だけっってんだろ！」
「ああ、待て部長！　落ち着けって！」
「荒木君、今はそんな事している場合じゃないから。とりあえず、椅子に座って一年生達の話を聞こうよ」
　一触即発かと思われたが、有希が強志をたしなめた事により危機は過ぎ去った。そして強志は言われた通り、椅子に座っては彼なりの聞く体勢になる。
「んじゃ、次！」
「じゃ、オレ！　オレは日ノ丸昇！　よろしくお願いします！」
　日ノ丸は閃理に負けないぐらい大きい声で名乗る。強志は今にも殴りかかりそうになったが、有希に制され大人しくしていた。
「……お前は初心者と聞いているが、それは本当か？」
「本当ですよ！　オレ、本格的にサッカーやるのは初めてですけど、どんな特訓でも喰らいついていくんで！」
「まぁ、練習次第で部長より上手くなるかもしれないしナ、ケケケ」
　と、蛇崎は強志の方に目を向ける。相変わらず鋭い目つきを保ったままだが、特に何かを言う気配はない。

「次は俺から言うぜ！　俺は南波海人！　俺もリトルの経験はないですけど、ゴールは任せてください！」
「ほう、南波はゴールキーパーなのか？」
「そうです！　イナズマジャパンの活躍見てから俺もサッカーしたくて、特に円堂さんがカッコよくてさ！」
「キャプテン、これは結構大きいと思うぞ？」
鈴司は閃理に話を振る。閃理は首を縦に振り、海人に顔を合わせた。
ここに来て正ゴールキーパーが獲得できるのは、チームとして大きな一歩だ。期待もそれなりにかかる。
「ウチにはゴールキーパーがいなかったんだ。期待してるぜ、海人！」
「うっす！」
そして、二年生の視線は最後の一人に集中する。その人物は不敵で強気な笑みを浮かべ、自分の名前を言う。
「俺は巽大地！　県内一最強の矛だ！　これからもよろしく頼むぜ！」
随分と自信に満ち溢れた肩書き、そう思わせるような確かな説得力に富んだ調子。それが巽大地。
しかし、この自己紹介に異を唱える男がいた。そのエメラルドグリーンは熱く炎のよ

うに燃えている。
「……県内一最強か……随分と大きく出たな、新入りと言いてえところだが……」
二年生のメンバーは「あ、これマズイやつだな」と推測し、全員耳をあらかじめ塞いだ。そして彼らの予想通り、閃理は声を張り上げる。
「小せえ！　俺からすりゃあ小さすぎるぜ、新入りィ！　県内一最強だあ？　どうせ目指すならその先、その上！　ストライカーのてっぺんを目指してこそだろうが！」
「っ!?」
大地は閃理の大きい声よりも予想外な返しに驚いた。彼のは名乗った肩書きは自称、人によっては勝手に彼を尊大で傲慢な人物だと決めつけ、冷たい言葉を浴びせてきた。
だが、閃理はとても熱い言葉で返してきた。だからこそ、大地の闘志はさらに火が付き、茶色の瞳の光は強くなる。
「……アンタ、面白いな！　もちろん、てっぺんは取るに決まってんだろ！」
場の空気が熱くなり出した。海人や日ノ丸も「俺だって、負けねえぞ！」、「オレも練習しまくって、追い抜くぞ！」と各々負けじと闘志を全面に出す。
が、丁度良いところで鈴司が軽く手拍子を鳴らした。続けて、「そこまでだ。話が進まなくなるぞ、キャプテン」と、たしなめるように言う。
その言葉に閃理は落ち着きを取り戻し、咳払いを一つして自分の名前を名乗る。

「今度は俺達の番だな。俺は鉄閃理！　このチームのキャプテンでディフェンダーをやっている！　歓迎するぜ、新入り！」

その後、閃理は不機嫌そうにしている強志に視線を向ける。どうも自己紹介できなさそうな雰囲気なので、彼の分も担当する。

「んで、そこに怖い目つきをしたのが部長の荒木強志。まぁ、ちとばかし怖えというか容赦ねえところがあるが、根は良い奴なんだ。よろしく頼むな」

「あれ？　何で、キャプテンと部長って違うんですか？」

日ノ丸が疑問を口にする。部長とチームキャプテンを同時に担っているのが一般的だろう。

しかし、青天中のサッカー部は珍しく両者の役割が分担されている。理由は何となく分かる気がするが。

「ああ、部長はこの部の創設者だからな。でも、俺にチームキャプテンを任せてくれたんだ」

「ふーん、そういう事だったんだ！　信頼してもらっているんだね！」

「ああ！」

他者を寄せ付けなさそうな強志が彼にチームキャプテンを任せていたのだから、信頼はかなり厚いと見て良いだろう。

ただし、真相は少し違う。それは強志だが知る話だが。
「次は私から言うね。私は樋口有希です。マネージャーをやっています。これからよろしくお願いします」
話に一旦の区切りが見えた為、有希が続いて自己紹介をし、丁寧にお辞儀する。生来の真面目さは滲み出ている。
「次は夜華君かな？」
「っ!?　ああ、分かった。俺は夜華藤四郎。ポジションはミッドフィルダーだ。よろしく」
有希に話を振られて一瞬体を強張らせた藤四郎。実は彼、女性が苦手であまり話す事ができないのだ。
しかし、それだとサッカーでも影響が出る為、連携が取れるぐらいには努力している。
「ケケ、次は俺かナ。俺は蛇崎利一、ディフェンダーをやっている」
目元が前髪で隠れている為、その表情は読み取れない。しかし、声の調子からして一応歓迎しているのだろう。
「最後は俺だな。俺は空賀鈴司、このチームの司令塔を任されている」
大地は眠そうな目つきをしている彼がどんな『眼』を持っているのかとても気になった。チームの頭脳である故に、何を見据えているのかを。

「んで、全員自己紹介終わったな！　っじゃ、十分後にグランドに集合！　とっと着替えろよ、新入り！」
「女の子は下の方に女子更衣室があるから、案内するね」
男女に分かれて、各々練習着や体育着に着替える。そして、時間通りに全員がサッカーグラウンドに集結した。
「これからミニゲームをやる！　チーム分けは簡単に攻撃側と守備側に分かれる……以上！」
閃理のざっくりとした説明でも一年生達は戸惑う事なく二手に分かれた。
まず、守備陣はゴールキーパーである海人がゴールに立ち、その前に閃理を中心に右が蛇崎、左がフェシリーとディフェンダー陣が固める。
そして藤四郎が先頭に立ち、牽制する役割を受け持つ。彼はミッドフィルダーだが、守備に活躍するタイプの選手の為、あえてこちら側にいる。
攻撃陣は先頭に強志と大地、実力が未知数な日ノ丸が並び、その後ろに鈴司がいるというかなり攻撃的な配置となっている。
合図は有希がホイッスルで鳴らす。甲高い笛の音が鳴ったら、大地が軽く触り、強志が後ろにいる鈴司にパス。
受け取った鈴司は全員の動きを見る。強志はゴールへ真っ先に向かっているし、大地

も同じように走っている。日ノ丸は大声を上げて呼びかけているが、蛇崎がきっちりとマークしていた。

そして、目の前に迫ってきた藤四郎のブロックを難なく躱し、大地にボールを送る。大地は閃理に背を向けてトラップ。

すかさず、フェリシーと閃理でプレスをかけるが、それに負ける大地ではない。

恵まれた体躯と高いボールキープ力で二人のプレスを崩し、ゴール前に迫る。そして、ボールを蹴り上げ左足に炎を纏わせては、跳躍し回転する。

まさしくそれは日本が誇る爆熱ストライカー・豪炎寺修也の代名詞――、

「ファイアァァァ、トルネェェェェード!!」

が放たれ、海人は驚きのあまり反応が遅れてしまう。生でそのシュートを見たのは初めてだからだ。

ボールは何の障害もなくゴールに突き刺さった。

「すげえ!　大地、あんな必殺技持ってたのか!」

近くに駆け寄る日ノ丸。興奮が抑えらないといった様子で話しかける。

「ああ!　こいつで得点を稼いでいたんだよ!」

「マジか!　やっぱり県内一最強名乗っているだけあるな!」

その陰で一人、鋭い視線で大地の背を睨む。しかし、その眼光は今まで違うように思

えた。
「おう、部長。今ので何かあったのか？」
　その視線に気づいた閃理が声をかける。
「……あいつ、結構強えな。足は遅せぇが、その分フィジカルもあるし、ボールもキープできる」
「そうだな。一年生にしてあんなパワーはすげえわ。今回は止めきれんかった」
「てめえを一回でも吹っ飛ばせるなら、大したもんだぜ。まあ、次は俺に回して欲しいけどな」
「部長、今日は変に落ち着いてんな。有希に何か言われたのか？」
　その一言にいつも強志の眼光が戻り、閃理は謝罪した後、足早に彼から離れた。また回し蹴りを飛ばされてしまうのは、流石に勘弁して欲しいからだ。
　ゲームは再開し、攻撃陣は攻め方を少し変えた。強志がドリブルし、相手陣地に切り込む。その間に大地がディフェンダーを引き付け日ノ丸がフリーになる。
　しかし、強志のドリブルはキレがなくただスピードに身を任せているだけ。フェシリーが難なくブロックし、クリアした。
「やっぱり部長に任せるとこうなったな」
「お前、分かっててやったのか」

「夜華だって、あえて抜かされているんじゃないのか？」
「別に……ただ今回は新入生の実力を測るのが目的だからな」
藤四郎は元の位置に戻る。鈴司も「それもそうだな」と言い、スタート時にいたポジションへと戻っていた。
またゲームが始まると今度は大地を主軸として攻める事となった。しかし、先程よりも強い圧が来た為、大地はどうにかプレスを崩して日ノ丸にパスする。
日ノ丸はそのままタイミング良く足を振り抜き、ボレーシュートを放つ。この事から日ノ丸はかなり運動神経は良い事が分かった。
海人はそのシュートをガッチリと両手で掴み、受け止める。小柄な体格から放たれたシュートとは思えない程の威力が手に伝わってきた。
「おお、日ノ丸！　お前、すげえ威力のシュート持ってんな！」
「そうか？　オレにはよく分かんねえけど、海人がそう言うならそうなんだな！」
初心者である日ノ丸はイマイチ自分のポテンシャルを把握していない。それどころか、先程の大地のシュートを見てしまったものだから、そこまで凄くは感じていないだろう。
こうして何度かゲームを繰り返しながら、互いの実力を確かめ合う青天中メンバー。彼らの様子を影で見つめる少女が一人。

「へえ、あたしチャン以外にもあんなに巧みにボールを操る人達がいるなんて……エンターテイナー魂が燃えてきちゃいましたのんっ」

青天を覆う雲はすぐ傍までやって来ていた――。

第二話：あたしチャンはあなたに挑戦状を送りますのんっ

一人の少女が階段の踊り場を陣取り、その周辺を行き交う一年生の視線を釘付けにしていた。

彼女が行っているのは何の変哲もないマジック。しかし、大小あらゆるボールが変幻自在に形や色を変え、見る者を飽きさせず魅了し続ける。

これだけでも少女がエンターテイナーとして如何に優れているのかが分かるだろう。それでも彼女はもっと人々を驚かせる為に、曲芸を取り入れ場を盛り上げる。

「さあさあ！　これがフィナーレよんっ！　その目にたっぷりと焼き付けておいてねん！」

どこか芝居かがった口調。だが、それが彼女の芸をより引き立たせている。そして小柄な身丈で披露された派手な芸は成功を収め、人々から盛大な拍手が上がった。

少女は猫目を細め、仰々しくお辞儀する。まるで一つのサーカスを見ているかのようだ。

「玉林！　またお前かぁー!!」

「あっヤバ……それでは皆さん、チャオ！」

野太い中年男性の声が響く。少女は大急ぎで自分の芸に使用した道具を回収し、速やかに撤退した。

少女――玉林天科（たまばやしてしな）は青天中の一年生の中で最も凄いエンターテイナーまたはマジシャンであると同時に学年一……否、恐らく学校一の問題児でもあった。

天科は追手からどうにかして逃げ切った。彼女が出た場所は校庭。そこであるものを目撃する。

つい先日も見たサッカー部の練習だ。相変わらず部員が揃っていない中、九人のままミニゲーム方式で練習を行っている。

「やっぱりあたしチャン以外にあんなに巧みにボールを操る人が……負けてられないですのんっ！」

数々の部員の中で彼女の赤褐色の双眸は一人を捉えていた。チームの中でも大柄な部類に入り、それでいてその恵まれた体格を持て余すことなく使いこなしてボールをキープしている少年。

彼の瞳は状況を冷静に分析しながらもゴールを何としてでも奪わんとする情熱で強く煌めいていた。――天科はその少年の情熱に心惹かれ釘付けにされた事を自覚する。

少年は天科の視線が集中している事も知らず、目の前にチャンスが生まれた瞬間、

ボールを上に蹴り上げては自身も跳躍して炎を纏う。そして、空中で回転したエネルギーをボールに蹴り込んでシュートを放つ。

鋭利で的確なコースにゴールキーパーの手は届かない。ゴールネットが揺れる。

包み隠さず大きくガッツポーズを決める少年。仲間達が各々彼を賞賛したり、先程の動きに対するアドバイスを送ったりとしている。

「ふふっ、決めましたのんっ！　あたしチャンはあなたに挑戦状を送りますのんっ」

天科は不敵に笑う。彼女の視線を奪った少年――巽大地に対する強いライバル心と自身のエンターテイナーとしての矜持を剥き出しにして。

それから翌日の事、大地と海人は頭を悩ませていた。仮入部中だというのに部員を勧誘しろという伝令が下ったのだ。

主に部長である強志からの命令だが、これから自分達が入部しても人数が足りないからまともに大会に出れないと言われてしまい、こうして自分達も協力する事になっている。

自分のクラスメートを勧誘してみたは良いものの誰一人もサッカー部に仮入部すらしようという気がなかった。

ここ静岡はサッカー王国とイメージが付いているだけあり、強豪がひしめき合っている都道府県の一つである。

そんな激戦区にわざわざ首を突っ込んでも自分が活躍できる場なんてないし、そもそもサッカー初心者がやっても……と思う者が多い。日ノ丸のようなタイプは稀有なのだ。

「思ったほど、人集まんねえな」

「後は日ノ丸達か……何か良い情報持ってきてくんねえかな」

男二人で昼食をつついていると、噂をすれば騒がしいコンビが彼らの教室に突撃してくる。

「よぉー！　大地と海人いるかー!?」

「面白い情報持ってきたよー！」

日ノ丸とフェリシーの声が教室内に響き渡る。生徒達は驚いて物を落としたり、慌てて耳を塞いだりして日ノ丸達の方を睨む。もちろん、大地と海人も例外なく彼らに厳しい視線を送る。

「そんな大声出さなくても俺も大地もいるよ！　っで、どんな情報だよ?」

海人は箸を止め、弁当の縁に置くと出入り口にいる二人に近づく。大地も海人同様に途中で止め、話の詳細を聞く為に近寄った。

「何かこの学校にマジックしたり、ボールとか何やら使ったりしてパフォーマンスするヤツがいるんだってよ！　この後、一緒に見に行こうぜ！」

「ボールやマジック？　それって、あれか？　玉林天科とかいう変人の事か？」
大地はは日ノ丸の話からある人物の名を口にする。玉林天科――入学してから早々休み時間になれば、学校中至る所で芸を披露し、人々を驚かせては教師に怒鳴られ足早に逃げるという事でもう既にちょっとした有名人と化している人物だ。
「Ｏｕａｉｓ！　絶対面白いと思うよ！」
「面白いかどうかってな……でも、誘う価値はありそうだな」
「まっ、それでもまだ昼食の時間だし、お前ら飯は？」
日ノ丸とフェリシーは声を合わせて「もう食べた！」と声を張る。再び周囲の目が厳しくなった。
その目を感じ取った大地と海人は待ち合わせの時間と場所を確認して、それぞれが在籍しているクラスに二人を送り返す。そして、その後は自分達のクラスに戻り、大急ぎで昼食に食らいつくのであった。
それから午後休み、日ノ丸達と約束した場所に向かう大地達。その場所に辿り着くと人だかりができていた。
「うわー、これどうすんだよ？」
海人がギャラリーの多さに辟易する。この中に小柄な日ノ丸やフェリシーを探すのは流石に骨が折れる。

「俺がじっと待っとけば、アイツら分かるんじゃねえの？」
「あー確かにな」
大地の一言に納得した海人。大地は一年生の中でもかなり身長は高い方だ。それどころか先輩達よりも高い可能性がある。
だから、あえて待つ事にしたのだろう。すると、日ノ丸やフェリシーがこちらにやってくる姿が見えた。
「やっぱ大地デカイから見つけやすいや！」
「うんうん！　隣に海人がいたからもっと分かりやすかったよ！」
「俺達がお前らを探すより確実だと思ったからな」
「大地の言う通りだな。俺も目印になって何よりだぜ」
四人は合流する。そして、人混みの中をかき分けて、これからパフォーマンスする芸人の姿を全員が視認できる位置まで何とか辿り着いた。
ステージの中央にいる少女はフェリシーと変わらないぐらいに小柄で、頭に小さなハット帽のアクセサリーを付けている。
赤褐色の猫目が周りを見渡し、ギャラリーの多さを確認する。その最中に大地と目が合うと少女は不敵に微笑んだ。
大地はその微笑みの意味が分からず、眉を顰める。少女はそんな大地の様子も露知ら

ず、他の人々に目を合わせていく。
「Ｍｅｓｄａｍｅｓ　ｅｔ　ｍｅｓｓｉｅｕｒｓ！　とびっきりのスペクタクルをこの玉林天科がお見せするよん！」
一通り、確認を済ませると天科は仰々しくお辞儀とともに挨拶をする。口調もどこか芝居臭さを感じる。
「今なんて言ったんだ？」
海人が小声で疑問を口にする。彼女が言っていた全体の意味が分からないというよりか、ところどころで使われた外国語の意味が分からないというニュアンスだ。
「うんとね、最初に言っていたのは英語でいうレディース&ジェントルマンの意味で、スペクタクルはショーって言う意味だよ」
「なるほどな、ありがとう。流石、本場の人間だな」
フェリシーと海人が小声で会話している間に天科はボールを次々と取り出し、華麗にそれらを捌いていく。しかも、大きさも形も違うボール達をだ。
そのボールコントロール力に大地は直感した。コイツは使えるぞと。
「さあさあ、最初はあたしチャンのお得意のボールジャグリングよん！　盛り上がっていってネン！」
手だけではなく足も器用に利用してボールは地を着く事なく一周する。時には天科

自身が動きを加えて、自由自在にボールが動き回る。
そして、その芸のフィナーレでボールを落とさず全てキャッチし、歓声を沸かせた。
「まだまだですのん！　お次はボールが瞬間移動してしまうマジックよん！」
と言って、野球ボールと同じサイズのカラーボールを取り出し、手元から姿を消させた。周りは大いに驚き、ボールの行方を探す。
「タネも仕掛けもありませんのよんっ！　……そこの大きなムッシュー！　ちょっと前に出てきて欲しいのです！」
「え？　俺？」
天科は大地を指差す。指名された大地は彼女の隣に立った。身長差は物凄くまるで大人と子供が並び立っているような感覚を覚える。
「ボールはこのムッシューのポケットに移動していますのよんっ！」
そんな訳がないと大地は思ったが、ズボンのポケットに違和感を覚える。その違和感の正体を探ると野球ボールぐらいの大きさのものが手に当たった。
まさかと思い取り出すと彼の手には天科が先程消したカラーボールが握られていた。
また再びギャラリーは盛り上がる。
「メルシー、ムッシュー。協力してくれた彼にも盛大な拍手をお願いしますのんっ！」
「俺、何にもやっていねえけどな……」

拍手が大地にも向けられる。そして天科の指示で大地は元の場所に戻った。何が起きたのか、分からないまま。
「おお、皆サマ！　残念な事にお時間がやってきてしまいましたのんっ！　誠に心苦しいですが、次が最後になるのです」
腕時計を見ている素振りをして芝居がかった調子で告げる。「えー」と残念がる人々の声がところどころに聞こえてきた。
「では、あたしチャンの最大のアンテルプレタシオンをその目で焼き付けて欲しいのよんっ！」
天科はどこからかそれなりの大きさのあるボールを取り出し、玉乗りしながら一番最初に行ったボールジャグリングを加えた。
そして、彼女の身丈からド派手な芸が繰り返され、フィナーレにボールに乗ったまま全てのボールをキャッチし、そのままお辞儀する。
その瞬間、今日一番の歓声が上がり、拍手や指笛があちらこちらに鳴る。天科も今日一番の笑顔で応え、ボールから降りていく。
「皆サマ、今日はありがとうございましたのです！　では、次の」
「よぉ、玉林。終わったか？」
パフォーマンスが終わったところを見計らったのか、ガタイの良い中年男性が天科の

後ろに現れる。
　男性はカッターシャツとスーツパンツにジャージの上着を羽織っており、首元のタグや雰囲気から教師だと判断できる。
「ご、ごきげんよう、メートル。あたしチャンのスペクタクルは如何だったですのん？」
「おう、素晴らしいものだったな……だけど、それを免罪符にはできねえな」
「……チャオ！」
「逃がす訳ねえだろ、この無許可魔術師！　今日こそは反省文を書いてもらうぞ！」
　いつも通りの天科と教師の追いかけっこが始まり、ショーは終わりを告げる。ギャラリーも次の授業の為に散っていく。
「ちょっと大地！　うらやましいぞ！　指名が入るなんてな！」
「いや、そう言われてもな……」
　日ノ丸に羨ましがられている事を余所に大地は先程の天科の事を振り返る。
　ショーが始まる前、自分に対して不敵な笑顔を浮かべた事。ボールマジックの際に自分を指名した事。気にしすぎだと思うが、どうも彼女に気をかけられていると直感していた。
「何か、あったのか？」
　海人が大地が何かしらの事に引っかかりを覚えている事を察し、声をかける。

「ああ、ちょっとアイツに……あれ？」
大地はふと詰襟の胸ポケットを見る。いつの間にか紙が入っていた。その紙を取り出すとそこには文字が書かれていた。
文末には天科特有の語尾が書かれてあり、彼女が書いたと思われる。内容は果たし状や挑戦状と見てとれるものだった。
「どうやら、向こうから出向いてくれるみたいだぜ」
スカウトするのには丁度良いと思った大地。彼もまた天科に負けないぐらいの不敵な笑みを浮かべ、彼女が走り去った方向を見つめた。
同時刻、有希は部室にいた。今日の放課後に買い足しておくべき、備品のチェックを行っているのだ。
これからの事を考えると備品は早い内に買い足しておく必要がある。どれだけ入部してくれるかは分からないが。
そんな彼女の背後に一人の少女が忍び寄る。そして有希に声を掛けた。
「あの……何か、お困りでしょうか？」
有希は驚き、慌てて振り返ると緑がかった銀髪におさげを二つ作っている小柄な少女が立っていた。幽霊やお化けのように足がないという事はなく、ちゃんと地に足が着いている事も確認し、有希は安堵する。

「ご、ごめんなさい！　驚かせるつもりはなかったんですよっ！」
「だ、大丈夫だよ。ちょっとびっくりしたけど……あなたはどんな用でサッカー部に？」
「えっ？　ここサッカー部の部室なんですか？」
　少女は現在いる位置について自覚がなかったらしく、有希に言われて初めて気づいたようだ。
　もしかして彼女は背後霊なのではないかと思うと有希は背筋に悪寒が走る。先程の確認も意味を為している気もしなくなった。
「うん、そうだよ。あなた、名前は？」
　とりあえず、気を取り直して有希は少女の名前を訊ねる。少女は舌足らずな話し方で答えた。
「私は桐月（きくづき）まのんです！　何か困っている感じがしていたので、もし良ければ、私にも何かお手伝いさせてください！」
　放課後、有希を除いた青天中メンバーがグラウンドに集まっていたが、いつものように練習はしていない。
　サッカーグラウンドのセンターサークルには二人が対峙していた。
「よぉ、待っていたぜ。玉林！」
「あらぁ、私の名前を覚えてくれたのねん。これは、エンターテイナーとして嬉しいです

のんっ！」

大地と天科は言葉を交わす。互いに熱い視線をぶつけ合いながら。

「そういえば、あたしチャンはあなたの名前を知らないのです」

「俺か？　俺は巽大地、県内一最強の矛だ！　よく覚えとけ！」

名乗りを上げる大地。その自信に溢れた調子から天科はとても好ましく思った。エンターテイナーでもそうだが、自分に自信がないものは良い芸はできない。

だから、大地のその強気な姿勢は自分が惹かれた理由の一つだと分かり、さらに彼に闘争心を燃やす。

「アイツ、いつもあんな名乗りしてんのかよ……」

一方、外野に徹している強志はグラウンドの端で座って、呆れ気味に大地の名乗りにツッコミを入れる。恥ずかしくないのかと思うのだが、そこまで突き抜けられるのはある意味才能かもしれない。

「むしろ、アイツの代名詞みたいなモンだから良いんじゃねえのか？　俺としてはもう少し上げても良いと思うがな」

閃理がフォローに入る。彼からすれば、まだまだ小さい自称だ。どうせなら日本一と名乗ってくれても問題ないだろうし、頼りがいもあると思っている。

「……それで、彼女はどれぐらい実力があるんだ？」

今まで静かに見守っていた藤四郎が口を開く。
「まだ分からないですけど、ボールの扱いは結構なものだと思いますよ」
「だって、色んなボール扱っていたもんな！」
「うんうん！　サッカー経験はあるかどうかは分からないけど、すごく器用な人だと思うよ！」
一年生が各々答える。その返答に藤四郎は「なるほど、見てからのお楽しみって事だな」と言い、再び大地達の方に視線を戻す。
ボールはまず天科が保持している。曲芸的なボールの扱い方をしているみたいだが、サッカーで考えるとあまり実用的ではないように見える。
「お前の実力見せてもらうぜ！　先輩、タイムお願いします！」
大地はそう指示すると閃理がタイマーを手に持ち「じゃ、準備は良いな！　よーい、スタート！」と大声で合図した。
天科はサッカーボールを器用に扱うが、空中にボールを放った瞬間、大地がダッシュし高さとフィジカルの強さを利用して空中戦でボール奪取。最初の勝負は大地が制した。
ボールを扱う事に関しては誰よりも上手いと自負していた彼女だが、身体能力の差は埋めきれなかった。これは自分の凡ミスだと考え、切り換える事に。

「次は俺からボールを奪ってみやがれ！」
「言われなくても！　エンターテイナーとして負けられないですのんっ！」
再び閃理の合図で勝負がスタートする。大地は真正面から奪いに来た天科を軽々と捌く。
天科は大地の次の動きを予測しながら動くが、彼の大きな体が壁となりボールに近づく事ができない。
ボールキープは大地の得意分野の一つ。そう簡単に彼が譲る訳もなく、天科は少しづつ体力を消耗させらていく。
大地の方はというとボールに神経を尖らせながらも天科の動きを視界の端で捉え、彼女の動きに合わせて自分の体を壁にしているという慣れた運動からそこまでのスタミナ消費はない。
試合なら彼よりも屈強な選手が相手となるのだから、天科のような小柄な選手のチャージは痛くも痒くもないのだろう。
タイマーが鳴る音と閃理の声により勝負は終わりを告げる。大地の圧勝だった。
その結果に天科はショックを受ける。まさかこうもあっさりと自分が負けるとは思わなかったのだ。
ボールの扱いなら誰にも負けないと自負している。けれど、こうも簡単にへし折れる

日が来るとは……。
だが、そう簡単に引き下がらないのが玉林天科。大地を指差し、高らかに告げる。
「もう一度勝負ですのん、大地チャン！」
その言葉に大地は口の端を獰猛に吊り上げ、了承した。
「ありがとうね、椈月さん」
「いえいえ、どういたしまして。お役に立てて何よりです！」
大地と天科が勝負を繰り広げている間、有希とまのんは校外を出ていた。そして、買い足すべきものを買った為、ただ今その帰路を歩いている途中だ。
「ところで、椈月さんはどこで私を見かけて追いかけたの？」
「それは……階段で先輩とすれ違った時、何か困っているというか難しい顔をしていたので……」
「ああ、多分チェックリストを考えていた時だね」
「それに……」
まのんは少し言い止め、今日一日の事を思い出す。日ノ丸と同じクラスの彼女は朝から元気に勧誘する彼の姿を見かけ、困っているのだなと思った。
だから、自分にできる事なら手伝おうかなと考えていたのだ。しかし、日ノ丸はフェリシーと合流すると風のように場所を次々と移転してまったので、何も聞く事ができな

かった。

サッカー部……日ノ丸とフェリシーがそう大声で勧誘していた部活名だから耳に残り、たまたますれ違った有希を追いかけては彼女からサッカー部の部室だと聞かされた時はここだと思ったのだ。

私はこの人達を手伝いたい。いつものお人好し精神だが、やはり気になる。だから、付いてきてしまったのかもしれない。

「一年生の方々が熱心に勧誘しているところを見て、私も何か手伝いたいなって思ったんです」

「そっか……そうだ！　椋月さんさえ良ければ、マネージャーやってみる？」

「良いですよ！　むしろ、お手伝いさせてください！」

まのんは二つ返事で了承し、サッカー部へ入部する事を決めた。

一方のグラウンドでは大地と天科の勝負をずっと続いていた。

「これで何戦目だよ？　もう十戦以上はしてんじゃねえのか？」

強志が呆れたかのような目で天科を見る。あれから天科は大地のフィジカルと高さを利用したプレーの前に敗北を重ねていた。

普通なら心が折れると思うのだが、折れずに何度でもチャレンジしているのは彼女の負けず嫌いが所以しているだからだろうか。

大地によく喰らいついていけるなと感心はしているが、流石に諦めなさすぎだろうとも思う。そういうところも嫌いではないが。

「ハハハハ、確かに十戦以上しているかもな！　でも、アイツ、結構ガッツがあって良いと思うぜ！」

「ふむ、キャプテンの言う通りだな。それに彼女のしなやかな動きはこのチームに必要なものかもしれん」

閃理が豪快に笑い飛ばし、鈴司は冷静に分析する。二人とも何度も立ち上がる天科にとても好感を持てた。

サッカー部に招き入れたいとも考えている程、彼女の加入はチームとして良い影響を与えるだろう。もちろん、選手としてのスペックも認めている。

ボールをたくさん扱ってきただけあり、触ることへの順応力の高さとコントロール力は目を見張るがある。またそのしなやかな体使いを得意としている人物は現メンバー内に少ない為、バランスも取れるだろうと思っていた。

「大地の方もよく集中力持つよな。伊達に県内一最強なんて名乗っていないって事か」

未だに負けない大地に海人は感嘆の言葉を吐く。

普通ならば集中力が切れてもおかしくない程の数の勝負をしているのだが、大地の集中力は途切れる事なく高い精度を保ったままボールを保持したり、奪ったりしているの

だから彼の実力も相当なものだと窺える。
　だからこそ、キーパーたる自分も負けていられないなと心の内で闘志を燃やしていた。今はまだ彼のシュートを止めることができていないが、いつかは必ずはと。
「ケケッ、どっちも負けず嫌いだろうから終わらない可能性もあるよナ？」
「かもな。まっ、今は静かに見守るしかないだろう」
「えー!?　もう私我慢できないよー!!　早く動きたーい!!」
「まぁまぁ、これでも食べて見ていろっテ」
　どこからもなく蛇崎は飴玉を取り出し、フェリシーにあげた。フェシリーは口の中に飴玉を放り込む、舐めながら静かに対決を見守る。
「お前、そんなもの持っていたのか」
「まぁナ、ケケ」
　と、彼らが言葉を交わしている間に事態は動きを見せる。大地の集中力が切れたのかボールが彼の足元から少し離れる。その一瞬の隙を逃さず、天科が彼から奪い取ってみせたのだ。
「おお！　アイツ、スゲー！　大地からボールを取ったぞ!!」
「ケケッ、とりあえずは一幕目が終わったって事だナ」
　一気に外野は盛り上がる。しかし、冷静なメンバーは大地がもう一度勝負を挑まない

かとヒヤヒヤしている。要はエンドレスバトルが始まるのではないかと心配しているのだ。

　そんな心配を余所に大地は大喜びしている天科の元へ近づいて声をかける。

「流石、魔術師ってところだな！　いや、負けず嫌いなだけかもしれねえけど」

「ウッフフ、そういう大地チャンも中々勝ちを譲ってくれなかったじゃない……負けず嫌いはお互い様じゃないかしらん？」

「ったりまえだろ！　そう簡単に負けちまったら、勝負にならねえし、失礼だろ？」

「あたしチャン、大地チャンのそういうところ好きよんっ！」

　二人は固い握手を交わした。そして天科は密かに思う。

　舞台でパフォーマンスする事を除いて、ここまで熱くなったのは初めてだ。この熱をエンターテイメント以外に打ち込んでみるのも良いのかもしれないと……。

　彼女の熱情は確実にサッカーへと向けられていたのであった。

第三話・あなたは太陽。煌々と闇を照らす太陽、私はその光を地より見つめるもの

朝、サッカー部の部室にて――。

「この玉林天科、本日よりお世話になりますのん！　サッカー部の皆々サマ、よろしくお願いしますのん！」

「えっと、椨月まのんです！　今日からサッカー部のマネージャーを務めさせていただきます！　よろしくお願いします！」

天科とまのん、二人の小柄な少女がメンバーの目の前に立ち、自己紹介をする。しかし、立ち振舞いはそれぞれ個性が出ていた。

天科は仰々しく大きく一礼して、まのんは丁寧にそれでいて柔らかくお辞儀をする。エンターテイナーとメイドの違いだという事だろうか。

「おう、よろしく頼むぜ！　天科、まのん！」

キャプテンである閃理がハッキリとした声音で二人を迎え入れる。他のメンバーを各々歓迎する言葉を吐く。

「ふむ、これで選手は十人か……後、一人欲しいな」

「なぁ、お前らさぁ、早速で悪りぃけど誰か心当たりないか？」
鈴司の言葉を受け、大地が二人に訊ねる。まのんはマネージャーを務める為、選手希望は天科だけ。
それ故に選手ができそうな人材がもう一人欲しいのだ。後、一人で十一人揃う。
「……一人だけイケそうなのがいますのん」
しばしの沈黙の後、天科が口を開く。彼女が言うには入学式前日に学校近辺でサッカーボールをリフティングしていた人物がいたらしい。
しかもその人物のリフティングは天科とはまた違うタッチで行っていたと言うのだ。
大地は話を聞いてスカウトしがいがありそうな人間だなと思った。このチームは比較的テクニカルなタイプが少ない。
どちらかと言えば、パワーやスタミナに偏っている気がする。自分が言えた口ではないけども。
「……なら、その人物がどこにいるのか調べる必要があるな」
「ケケッ、これは時間がかかりそうだナ」
「んなの、そこら辺の奴をとっちめて聞けりゃいいだろうがよ」
「荒木君、手荒な事はしちゃ駄目だよ」
二年生が各々意見を述べた。名前も学年も分からない為、手探りでその人物を探し当

てる事になる。

今回は総動員になるのだろうと誰しもが思った。ある一人の言葉を聞くまでは。

「私、もしかしたら知っているかもしれません」

舌足らずな口調で話すまのんは記憶を呼び起こしていく。彼女が図書室で手伝いをしていた時、一緒に作業をしていた少女……他愛ない身の上話に花を咲かせていた時にふと耳にした「フリースタイル・フットボール」という単語が思い浮かぶ。

その競技について詳しく訊ね、少女は丁寧に教えてくれた。ついでにその手の選手だった事も。天科の話と組み合わせれば、彼女が一番その特徴に近いのでは推察する。

「なるほど、図書室か……誰が行く？」

鈴司はメンバー一人一人に目を合わせていく。図書室に行くメンバーは比較的静かにできるのが良いだろう。そう考えるといつも騒がしい日ノ丸とフェリシーは確実にアウトだ。

また強志も避けた方が良い。彼の気質的にスカウトに向いているとは思えない。脅迫という手まで使いそうだ。

「俺が行きたい」

大地が挙手する。誰もが彼なら問題ないだろうと認める。候補者は一人決まった。

「それで俺からの提案だけど、まのんも一緒に来て欲しい」

「ふぇ!?　わ、私ですか!?」
「ああ、そいつと顔見知りなら初対面の俺よりかは話しやすいだろ？」
「そういう事ですか……はい、なら喜んで！」
　大地の推薦でまのんもスカウトに行くメンバーとなる。後、もう一人ぐらいは欲しいと大地は考えて……海人と目を合わせる。
「よし、俺も行くぜ！」
「決まりだな。キャプテン、今回はここまでにしよう」
「そうだな、次は放課後だ！　解散！」
　それから昼休み、昼食を食べ終わった大地と海人はまのんと合流して図書室へと向かう。室内に入ると大量の書籍が収められた棚と部屋の隅に設けられた受付が目に入った。
　受付にはブロンドのロングヘアーの少女が読書しながら、静かに人を待っている様子が見受けられる。
　まのんは彼女が以前話した事のある人物だと確認し、大地達にその事を告げた。大地達は彼女の元へ歩み寄る。
「あのぉ……月宮（つきみや）さん……」
　恐る恐るまのんが声をかける。月宮と呼ばれた少女は呼びかけに応じ、本を閉じてま

のんと目を合わせる。大地のとは少し違う色合いの茶瞳はとても穏やかに訪問者を受け入れる。
「何かしら？」
「月宮さん、サッカー部に興味ありませんか？」
「どうして？」
「今、俺達の部活は人手不足なんだよ。お前がフリースタイル・フットボールっていうヤツの競技者って聞いて、それでお前をスカウトに来た」
大地が包み隠さず理由を話す。落ち着いてはいるが、元々まどろっこしい事は苦手かつ直情的な性格だ。遠回りに聞くのは面倒この上ない。
「ふーん、なるほどねえ……」
「まっ、無理には言わねえよ。できれば、力を貸して欲しいけどよ」
海人が口を開く。あと一人でサッカーができる人数に達する。無理強いはしないが、加入をしてくれれば大助かりだ。
「でも、私はボールコントロールには自信があるけれど、その他は駄目よ？」
「安心してくれ。ゼロからスタートしている初心者もいる」
日ノ丸の事だ。彼は天科や月宮のような特別な経験を持ち合わせていない初心者であり、この中では最も経験値が低い選手にあたるだろう。その事も話題に出しながら大

地達は話を進める。
「俺もサッカーやっていたが、リトルとかジュニアチームに入った事ねえし、経験者なんて数える程だぞ?」
「……そう。でも、少し考えさせて。そんなに急に言われても決められないわ」
　月宮の言葉で話は区切られた。「そうか、ならまた来るぜ」という大地の一言を最後にスカウトチームは図書室を後にした。
「すまないな、こんな時間に集まってもらって」
「良いって、気にすんなよ!」
「うんうん、空賀君が呼び出すって事は重要な事だと思うし」
「そうか、ありがとう」
　大地達が月宮と交渉している間、部室にて鈴司と閃理、有希の三人が集まってホワイトボードを眺めていた。
　ホワイトボードにはサッカーのハーフコートが描かれており、一人欠けた状態でポジションが組まれている。
　最前線は日ノ丸、大地、強志のスリートップ。中盤の中央には鈴司がおり、右サイドの中盤に天科、反対側として藤四郎で支える。
　ディフェンダー陣はセンターバックに閃理、両サイドはフェリシーと蛇崎で守りを固

めていた。
　ゴールキーパーはこのチーム唯一の守護神、海人が務める。
「これは俺なりに現メンバーでフォーメーションを組んでみたのだが……」
　鈴司は考え込むように重く留める。その視線の先にはフォワードを務める三人の名前。彼の悩みはそこにある。
「まぁ、一人足りないのは仕方ねえとして、どうしたんだよ？」
「ああ、ちょっと言葉にするのが難しい問題だなと思って……」
「もしかしてだけど、三人ともドリブル技がない事に悩んでいるの？」
　鈴司は目を見開き、有希の方に顔を向ける。彼女は鈴司に顔を合わせず、フォワードの三人を見つめたまま続けた。
「だって、荒木君や日ノ丸君はともかく、巽君もシュート技しか使えなかったよ？」
　ここ数日の練習で最初に仮入部してきたメンバーの技は把握している。ただドリブル技はゴールキーパーの海人を除いて、フェリシーしか覚えていない。
　おまけにフォワード三人のドリブル技術は、お世辞にも上手いとは言えない。
　初心者の日ノ丸はまだしも身体能力が高いのに何故か不器用な強志とボールキープ力はあるものの躱す能力が低い大地。
　有希はこの二人を見比べてある事を言う。

「何だか、荒木君と巽君って似ている気がする……」
　その言葉の意味を察した鈴司は反応した。
「確かにな。部長も巽も似ている節はある」
「どこかだよ？　サッカーに対する情熱は二人とも似ていてるだろうけどよ」
　閃理は一人置いていかれてしまい首を傾げる。二人のゴールに対する執念は似ているものがあるのは、もう分かっている。
　しかし、二人のプレースタイルは似ているようで似ていない。
　強志はテクニックは壊滅的だが、持ち前の身体能力で突破しゴールを確実に決められる決定率の高さを誇っている。
　対する大地は高さとパワーを活かして中央突破し、時には最前線の司令塔として仲間をアシストするポストプレイヤータイプだ。
　と、ここまで考えて閃理はようやく気付く。二人ともドリブラーに向いていない事を。
「なぁ、鈴司に有希……これって意外とヤバくねえか？」
「ああ、俺もそう思う」
「うん、そうだね」
　三人は触れていない一人に目を向ける。彼は二人にない強みがある。飲み込みの早

さと二人よりは幾分か器用な事……もしかしたら、また違う突破口が生まれるのではないかという期待の眼差しが注がれた。

それから放課後、サッカー部は今までとは少し違う練習をしていた。

二手に分かれて初心者である日ノ丸と天科に基本的な事を教えている。

日ノ丸には大地、藤四郎、閃理、海人が付いて練習を行っている。天科の方には強志、鈴司、フェリシー、蛇崎で手解きをしていた。

ただ、天科の方はボールを用いたパフォーマンスをしていただけあり、ボールの扱いは問題がない。如何にサッカーの動きに対応できるかというだけ。

「ふむ、思っていたよりも早く慣れそうだな」

「そうですのん？　あたしチャンの感覚だとまだまだですねん」

「ケケッ、まぁ今の段階でも部長よりか上手いゼ？」

「蛇崎、てめぇ後で覚えとけよ」

若干、険悪なムードはありつつも天科の方は思ったより早いペースで事が進みそうだった。一方、日ノ丸の方では……。

「ええ!?　オレにドリブル技を!?」

日ノ丸は大きく驚く。閃理からドリブル技を習得する特訓を行うと聞かされたからだ。何で自分なのが少し分からない。

「……なるほどな、確かに日ノ丸が適任だな」

閃理の意図を読み取った藤四郎は、静かに理解したという趣旨の言葉を呟く。

確かに日ノ丸は初心者だが、運動神経は悪くないし、小柄ながらも身体能力もそれなりに高い。それに二人と比べるとドリブルに関しての才能はある。彼らとは違う強みを日ノ丸は持っているのだ。

「良いじゃねえか、日ノ丸！　とことん付き合うぜ！」

「大地の言う通りだな！　俺はキーパーだけど、手伝うぜ！」

熱血コンビは閃理の提案に対して肯定的。なおかつ、協力的な姿勢で日ノ丸の背中を後押しする。

大地は自身があまりドリブルが得意ではないのを自覚している。昔から足が遅いし、機敏な動きもできない上にそこまで器用ではない。

ただ力と高さは昔からあった。それを武器に今まで戦ってきて、足の遅さは戦術眼を養ってカバーする事で何とかしてきたが、ドリブルは本当に上手くならなかったなと振り返る。

だからこそ、日ノ丸には期待していた。自分にはない武器を持つ可能性があるという事は、自分の弱点をカバーしてくれる上にチームの戦術にも幅ができる。これは最大のチャンスだ。

「大地も海人も特訓手伝ってくれるって言うし、オレやりますよ！」
「マジか！　よし、早速やるぜ！」
「待ってくれ、キャプテン。何の技を習得するか決めないと」
日ノ丸が承諾してくれた事に閃理は意気揚々と練習に取り掛かろうとするが、藤四郎が制す。
何の取っ掛かりがないまま特訓しても意味がない。藤四郎は日ノ丸に「何か希望あるか？」と質問を投げかけた。
すると、日ノ丸は珍しく悩んだ表情を浮かべる。初心者だし、無理もないかと藤四郎は早々に切り上げようとしたら、「どういう名前の技かは忘れたんですけど……」と日ノ丸が話し始めた。
元々サッカーは遊び程度しかやっていなかった日ノ丸。しかし、去年のある日、たまたま友達に誘われて見に行ったジュニアの試合で転機が訪れた。
自分よりも同じぐらいか少し小さな体格の子が次々と相手選手を抜いてシュートを決めたところを見た瞬間、日ノ丸は頭から電流が流れたかように強い衝撃を受けた。
ただ凄い、自分もあんな感じにやってみたいと。サッカーというスポーツに強く興味を惹かれたのだ。
その時に日ノ丸に強く影響したプレイヤーが使っていた技が、一人でワンツーを成立

させるようにボールを回転させ、相手を抜かす技だったという。
「……ひとりワンツーか」
藤四郎は日ノ丸の話を聞いて、技を推察する。ひとりワンツーを使うプレイヤーは多い。そう難しい技ではないだろう。
「じゃあ、それにしようぜ！　どうせなら、思い入れのある方が良いだろ？」
同じく話を聞いていた大地が推し進める。自分がファイアトルネードを習得した時は、有名プレイヤーに対して特に思い入れはなかった。
けれど、この技は使えると直感し、ひたすらに真似して特訓していた。そして、今使えるようになっている。
「おう！　いつかオレも使ってみたいって思ってたんだ！　だから、頑張ってものにしてみせるぜ！」
日ノ丸は太陽のような眩しい笑顔で意気込みを言い、改めて特訓を受ける事を示した。
日ノ丸の特訓で熱くなっている頃の図書室。昼休み時、大地達にスカウトされていた月宮クレアは、図書の整理を終えると窓辺に立って景色を眺めていた。
彼女の視線の先にはサッカー部が練習しているサッカーグランド。技に失敗して何度も転んでは立ち上がる日ノ丸を凝視する。

特に彼と関わり合いがある訳ではないが、どこか惹かれる。太陽、ふと頭の中に浮かんだ。

「あなたは太陽。煌々と闇を照らす太陽、私はその光を地より見つめるもの」

彼女の言葉は誰の耳にも届かず、どこかへと消えていく。

それから翌日もサッカー部では部員総出で日ノ丸の特訓をサポートしていた。もちろん基本的な動きもレクチャーしながらだが。

思いの他、日ノ丸の吸収は早い。言動からして脳筋まっしぐらかと思いきや物事に筋を通して考える為、他人のアドバイスも的確に受け取って自分のものにできる。

しかし、彼が修得しようとしている「ひとりワンツー」までは中々辿り着かない。ボールコントロールに関しては、天科からもアドバイスを受けているが、そのきっかけすら掴めないままでいた。

だが、特訓は始まったばかりだとめげずに日ノ丸はチャレンジし続ける。

「でも、雨はないだろう！　雨って！」

また一日が経った放課後、日ノ丸は教室で声を張り上げていた。この日はあいにく雨が降ってしまい部活は休み。

基本的に仮入部期間は雨天時だと外で活動する部活は休みにするというのが決まり。例外的に室内練習を行う野外スポーツ系の部活もあるが、新入生は参加できない形と

なっている。
「仕方ねえだろ。それにここは室内練習場なんてねえし」
「でも、退屈だよー」
「確かにお暇なのよねん」
　海人がなだめるが、別のところでフェリシーと天科が嘆く。雨により動き回れる場所が制限されてしまった事により、少々気が落ちている。
「だから、使えそうな場所探してんだろ？　うーん、部活棟の連絡通路でも使うか？」
　大地が言っている通り、彼らは日ノ丸の特訓の為に使えそうな場所を探していた。だが、体育館はバスケ部やバレー部などが占領しており、使える状況ではない。
　他に使える場所がないかと検討してみるが、基本的にスペースが狭いのと窓ガラスがあるという関係で候補はことごとく消えていく。
　そういった状況で大地は連絡通路を使う事を提案した。部活棟への連絡通路は野外に出る為、屋根と壁のみという造りとなっている。
　さらにスペースも一対一をやる分には申し分がないし、今日は野外の部活が休みとなっている為、人の行き来も少ない。
「そこなら使えそうですね！　賛成です！」
　まのんは大地の意見に賛同する。他のメンバーも特に異を唱える事はなかった。大

地達は部活棟の連絡通路に向かう。

大地の目論見通り、連絡通路は人通りがなかった。ただ野外に出ている通路の為、風が吹く方向によっては雨が直撃するのは覚悟するしかないだろう。

「つしゃ！　早速特訓だぜ！」

「おっし！　よろしく頼むぜ、皆！」

天科が用意したサッカーボールを足元に転がし、日ノ丸と大地が対面する。他のメンバーはボールが奥に行かないように出入り口を塞ぐ形で立って見つめていた。

日ノ丸はボールを飛ばす場所のイメージを浮かべ周りを確認。あらぬ方向に行って、この雨天の中で取りに行く事がないように。

試合だとそんな時間はほんの一瞬しかない。実戦を想定したものなら時間をかけるべきではないが、現段階ではまず技を修得する事が目的。だから、大地は何も言わずに彼が動き出すのを待つ。

そして確認を終えた日ノ丸はあの時見たドリブルを重ね、大地を突進するかのように走り出す。大地とすれ違う前、斜め右手の方向へボールにスピンをかけて蹴った。

回転は上手くかからず、ただボールが勢いよく放たれただけになり、壁と激突して進行方向を変える。結果的には大地を抜かした日ノ丸の足元に収まった。

「大地！　もう一回だ！」

「おう！」
　日ノ丸は反転して再び挑戦するがボールを上に蹴り上げてしまい失敗。大地の頭上を通過し、校舎側の方にいたまのんと天科では高さが足りず、校舎内に入っていく。
　しかし、通りかかった人物がそれを受け止めたおかげで奥に転がっていく事はなかった。
「久々に人が蹴ったボールを受け取ったけど、まだ止められるわね」
「あ、月宮！」
　大地が受けた人物の名前を言う。天科もクレアがいつぞやで見た人物と似ている事を認め、大きく目を開いた。自分と似た強みを持つ者、まさかここで再会するとは……。
「あら、あなたはこの間の……」
「巽大地だ。県内一最強の矛だぜ！」
「矛……なるほどね」
　クレアは大地を品定めするかのように見つめる。同い年とは思えない程に背がとても高く、ガタイも良い。確かにこれなら矛としては申し分ないのだろう。しかし、クレアはそうではないと感じた。
　彼の中には地を這う竜が見える。しかも、炎を纏い周りを焼き尽くさん限りに燃え盛っていた。

昔読んでいた本の中に地球の核は太陽よりも熱いと記されていた事を思い出す。まさしく地球だ。彼は地球に近いものを感じる。
「あなたは地球ね」
「は？」
「いえ、気にしないで。こちらの話よ」
そう話が途切れた頃合いに天科が口を開く。その目つきはとても挑戦的だ。
「月宮チャン……って言ったかしら？　あたしチャンはあなたがボールを捌いているところを見た事あるのよん」
「そう、あなたに知られるとは光栄だわ。ミス・エンターテイナー」
クレアは片眉の尻を少し上げるだけで特別動揺しない。元々隠すつもりがなかった為、知られていても問題はないと。
「あら、あたしチャンの事をそう呼んでもらえるなんて……」
「ねえねえ、あなたボールの扱い上手なんでしょ？　見せてよ、あなたの技を！」
フェシリーの声が割って入ってきた。続けて、海人もクレアに対して頼みを言う。
「俺も見たいぜ！　フリースタイル・フットボールとかいうヤツの実力をよ！」
「妖精に海神（わたつみ）も……良いわよ」
「良いのか！」

日ノ丸がクレアに期待の眼差しを向ける。もしかしたら、彼女のプレーで必殺技に繋がるきっかけを得られるかもしれないという微かな希望が彼の胸の中に芽生えていた。

一方のクレアは日ノ丸の真っ直ぐな瞳に自分が惹きつけられている事を自覚。月は地球に引かれているが、私はそうではなかったと。

太陽が闇を照らす。その光を見つめて思うは、己の影の濃さ。それ程に陽光は強いのだ。どうしてこんなに強いのか、私は知りたい。

「ええ、別に隠していた訳ではないし……でも、あまり期待しないでね?」

思いをそっと胸の内にしまいながら、クレアはボールを軽く上げてリフティングを行う。最初は右左右とボールを静かに足の上を往復。続いては膝も使う事で上下の動きも加わり、時々足の甲やうなじにボールを止め緩急も付けていく。

最後にブレイクダンスの決めポーズを用いて両足でボールを挟み込み、数秒その姿勢でを制止。ボールを落とさないように扱い、姿勢を正す。

「スゲェー!」

日ノ丸が感嘆の声を上げる。フェリシーも海人も大地もだ。しかし、天科はエンターテイナー魂に火が付いたのか、対抗心剥き出しでクレアに突っかかる。

「あたしチャンもそれぐらいはできるのよん!」

「むしろ、ミス・エンターテイナーがこれぐらいできなければ、名折れでしょう?」

クレアは天科の勢いに呑まれる事なく悠然と受け答える。同じぐらいの背丈で似たような特技を持っているというのに正反対な二人。

これまた面白そうな組み合わせだなと大地は思う。しかし、クレアの目を見てある事に気付いた。クレアの興味は天科にはない事に。

眼中にないという訳ではないだろうけど、それよりも強く惹かれるものがあるという感じだろうか。真意は彼女の胸の内、これ以上は推し量れない。

「あの玉林さん、落ち着いてぇ……」

「落ち着いているのん！　ただ私のエンターテイナー魂に火が付いちゃっただけですねん！」

「だから、落ち着いてぇ！」

天科とクレアの間にまのんが割って入り、何とかして天科を宥めようとしている。

だが、天科は落ち着く様子はない。ヒートアップしていくばかりだ。

困り果てているまのんを見て、これ以上は話がこじれていきそうだなと判断した大地は助け舟を出す。

「玉林、そこまでしとっけって」

「何よ、大地チャン！　これは私にとって」

「月宮がチームに入ってからにすりゃ良いだろ？」

大地は無理やり天科を黙らせて、クレアに入部の事を持ちかける。先程の彼女の動きなら十分やっていけると確信して。

「つで、お前をサッカー部に入れたいんだが……まだ駄目か？」

「ええ、もう少し考えさせてちょうだい。けれど……」

「けれど……？」

クレアは視線を日ノ丸に合わせる。自身がサッカー部へ興味を持ったきっかけ、少しぐらいは手助けしたい。

「あなたの特訓を少しだけ手伝って良いわよ？」

日にちが経ち、仮入部期間の最終日。日ノ丸は相変わらず技の特訓をしていた。

しかし、以前よりもコツを掴んできている。

「鏡が必要よ。太陽の光を反射させるには鏡が必要なの」

クレアの抽象的なアドバイスを理解した日ノ丸はあの時憧れていたイメージではなく、自分に合った感覚で一歩ずつ完成へ近づけていく。

重ねる必要はない。自分のプレースタイルにあった形がどこかにあるはずだ。だからこそ、ボールを強弱なんて考えられていない。

ひたすら強く蹴り込みスピンをかける。パスは苦手だが、そのままの勢いを使えば武器になるだろう。

しかし、失敗は繰り返される。その度に日ノ丸は立ち上がり、何度も挑戦していく。
「もう一回！　もう一回だ！」
「そのいきだぜ、日ノ丸！　さあ、かかってこい！」
閃理が立ちはだかり、日ノ丸の動きに合わせて進路を塞ぐ。技量差は歴然だが、ここはあえてボールを奪わない。
目的はあくまで日ノ丸の必殺技の完成であって、精度を高めるという事ではないのだから。
一方の日ノ丸は、ぎこちない動きで右往左往して閃理を揺さぶりつつタイミングを窺う。そしてボールを強く蹴り、反対方向に飛び出す。
ボールはスピンがかかりきらず、あらぬ方向へ飛んで行ってしまった。先には端で見守っていたクレア。物凄いスピードで来たが、何とか捌いて止める。
自分にはない強さを感じた。なるほど、少し惹かれた意味が分かった気がする。
クレア自身も努力は怠っていない方だが、この力強さはない。折れない心……その光はまさしく太陽だ。
「悪かったな、クレア！　ありがとう！」
「いいえ、どういたしまして」
そう言い、クレアはボールを取り近づいてきた日ノ丸にそれを手渡す。よく観察する

と彼のあちらこちらに絆創膏が貼られてあり、いかに彼が特訓に全力で取り組んでいるのかを物語っていた。
「あなたは何故、そこまでするのかしら?」
「え?」
「あなたを駆り立てるものは何なのか……少し知りたいの」
「うーん、それはオレにもまだよく分かってないけど……憧れている人がいて、その人に近づきたいからかな」
首を軽く傾げ答えを口にする日ノ丸。自分がサッカーを始めたきっかけ、同じ舞台を見てみたいという憧れは心中にある。
クレアは日ノ丸の答えを聞いて「そう、引き留めて悪かったわね」と言い、日ノ丸に練習へ戻るように促した。
「あの……月宮さん」
「何かしら、椋月さん」
「どうして、そんなに日ノ丸君の事を気にしているんですか?」
一歩引いた位置にいるまのんが開く。彼女の観察眼と洞察力は鋭く、些細な事でも感じ取れてしまう。故にクレアが日ノ丸に興味を持っている事は察していた。
「……それは私にも分からないわ」

胸の内を覗いてみたが、答えは見つからない。ただ何となく彼の力強さに惹かれているのは分かっている。惹かれている……？

果たして、その言葉は適切だろうか。もしかしたら、憧れているのではないか。……疑問は尽きない。

「なら、いっその事入った方が良いんじゃないでしょうか？　答えが見つかるかもしれませんよ？」

隣に並び立つまのん。彼女も背は低い方だがクレアよりは背が高い。舌足らずな話し方でどこか幼げな印象があるが、この時だけ少し大人びていた。

クレアはまのんを一瞥した後、フィールドの方に視線を移す。視線の先には相変わらず悪戦苦闘している日ノ丸の姿があった。

それでも太陽は燦々と煌めき、楽しんでいる。眩しい……だからこそ、心が動く。

クレアがまのんの提案を呑んでみるのも良いなと考えていた次の瞬間、日ノ丸に変化が訪れた。

何回、何十回目の挑戦。日ノ丸がボールにスピンをかけて蹴り出し、同時に相手を抜かす。ボールはまるで光が鏡に反射したかのように軌道を変え、飛び出した彼の足元に収まる。——技が完成した。

日ノ丸を含めチーム全体が歓喜に包まれる。その中で端にいるクレアとまのんは言

葉を交わしていた。
「椈月さん」
「何でしょう?」
「私、サッカー部に入るわ。この胸に溢れる激情を知りたいもの」
クレアの言葉にまのんは満足げに微笑み、頷く。そして確信していた。このチームなら彼女の望む答えはきっと出て来るだろうと。
当のクレアは日ノ丸に視線を釘付けにされている。考えても答えが出ないのであれば、行動あるのみ。そうして掴み取った物語の主人公はいる。ならば、やってみない手はない。
月は太陽に吸い寄せられ、青天中サッカー部はようやく十一人の選手が集まった。